

説教余滴 2019年8月18日、福音を語っている

言行録 20:7 以下は、続きます。ユティコは、居眠りしました。昼間の働きで疲れていました。これは彼の側の居眠り理由です。説教者・パウロの側にも幾つか理由があります。

話し声の高さ、調子、眠気を催す声の調子があるようです。引き込まれるように眠ってしまいます。学校や会議の長話、単調に続くと眠ります。落語・講談・浪曲など日本の話芸は、この点で見事です。出だしの枕、客席を見回しぼそぼそ低く聞こえないように話しかける。反応を計っています。次第に声の調子を上げる。こうして本題に向かいます。

比屋根安定教授はよく言われました。「君たちは、新宿の寄席へ行って学びなさいよ」。

教会の宣教は、聖書一巻を解き明かすするものです。旧新66巻は語りつくせません。素材と考えるなら十分すぎるほどです。説教家として高名なある牧師は、あるとき教えてくださいました。「説教というのは繰り返しじゃよ。わしなどは十年も経つと種がなくのうて、古いノートをひっくり返しとるよ。」

説教は、あの使徒言行録 2:32,36 にある様に、〈あなた方が十字架にかけて殺してしまったイエスを、神様は甦らされ、命の君となさった、わたしたちはこのことの証人です〉、

これを語るのが、礼拝説教です。飽きさせないように手を替え、品を替えて話すことになります。本質は、ひたすら、甦りの福音を語ることだ、と考えます。

母教会の老牧師、ある日語りました。『ある教会に年老いた老牧師が居った。礼拝の時、いつも居眠りをしている。時々目を覚ます。そしてその時、息子が福音を語っているのを聞くと、うなずき、安心してまた居眠り。老人はこれでよかろう』。御自身のことでした。

説教中の居眠りを正当化する話ばかりです。そして説教者は、居眠りさせないように聖霊の働きを祈ります。